

「信仰年」と私たち (I)

主任司祭 吉池 好高

最近教会にお出でになると、「信仰年」ということばを耳にしたり、「信仰年」と書かれた掲示物を目にしたりする機会が多くなったことにお気づきでしょうか。私たちのカトリック高円寺教会は、全世界に広がるカトリック教会の、私たちに最も身近な「情報中継基地」です。その私たちの高円寺教会で、全世界のカトリック教会のいわばトップである教皇様が発信している「信仰年」の呼びかけが十分キャッチされていないとするなら、私たちの高円寺教会は、「カトリック情報中継基地」としての機能において重大な損傷を抱えていることとなります。今回の教皇様の「信仰年」の呼びかけが、こと、信仰に関わる呼びかけであるがゆえに、教皇様から発せられている「信仰年」の発信が私たちに十分伝わって来ないとするなら、ことはより深刻です。この情報の意味することが、私たちに十分キャッチされないとするなら、それは、私たちの高円寺教会の一部の機能が不全に陥っているというだけのことではなく、私たちの高円寺教会が今の日本社会において「カトリック教会」として存立することの意味が問われる重大事態に直面しているということになります。

私たちが生きる現代社会は情報過多の情報大量消費の社会です。そのような情報大量消費社会にあって、情報が情報としての機能を果たすかどうかは、情報の受け手である私たちに掛かっています。情報の受け手の興味をそそり、受け手に意味ある情報と認められる情報だけが、情報としての機能を発揮することが出来るのです。更に言えば、情報の受け手である私たちがどのような情報に興味をそそられ、どのような情報が自分にとって意味のある情報となるかは、情報の受け手である私たちの生活感覚と、普段私たちがあまり意識することのない、その基になっている私たちの価値観によって決まります。

スポーツに興味のある人にとっては、スポーツの情報が意味を持ちます。就活中の学生にとっては就職情報が必要な情報です。健康に不安を抱えている人は医療関係の情報に目がいきます。

「信仰年」の情報は、私たちにどれほどの意味を持つ情報となっているのでしょうか。